

旧松本家・安川家住宅について：その建築的価値と日本を代表する地方財閥

著者名(日)	清水 憲一
雑誌名	九州国際大学経営経済論集
巻	17
号	2
ページ	51-106
発行年	2011-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000191/

旧松本家・安川家住宅について

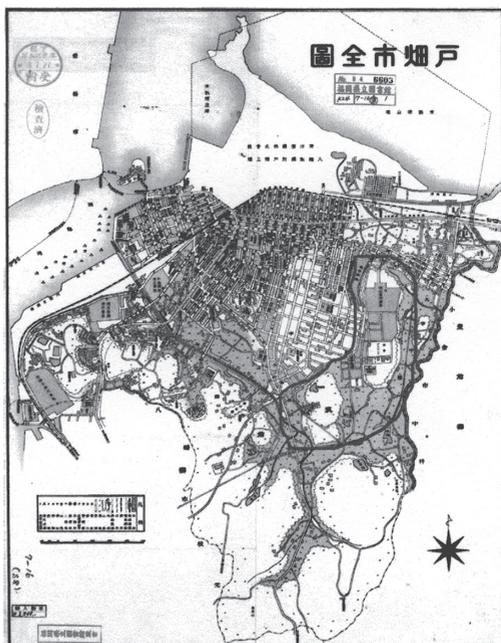
—— その建築的価値と日本を代表する地方財閥 ——

清 水 憲 一

北九州市のほぼ中央にあたる戸畑の夜宮公園、その南隅の鬱蒼とした木立の中に溶け込むように二家族の邸宅が門を構える。

明治末年、炭鉱主・実業家の安川敬一郎・松本健次郎の父子は、専門学校を創立するために、桜の名所安部山を含む一帯の林野・原野65分²/₄（65万㎡）を買収した。この用地の南丘陵地の木立の中に邸宅を設けた。当時の日本を代表する建築家・辰野金吾が設計し、父子が経営する会社に臨時建築部を設け、用地の開発と建築にあたった。

現西日本工業倶楽部の旧松本家住宅は、「現存する洋風住宅のなかでもっとも華麗な建築のひとつ」で「アール・ヌーヴォーの館」と称され、国の重要文化財に指定されている。隣接する旧安川家住宅は、明治・大正・昭和の三代に



【図1 購入地】

(注) 1933年の戸畑市全図に推定した地所を落とし込んだもの。

わたって増改築した住宅が現存し、住まいの洋風化と和洋折衷技法の変遷を辿ることができる。

以下、この両家住宅の建築的価値とそれを可能にした安川・松本の事業展開を整理する。

1. 安川・松本家住宅の建築的価値



【図2 安川・松本邸空撮】参考文献8

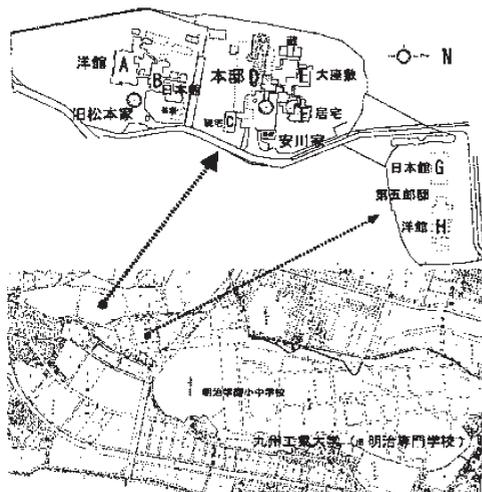
安川敬一郎は、黒田藩士徳永貞七の四男として、福岡鳥飼村に生まれた。長兄の織人が徳永家を継ぎ、兄の潜は松本家、徳は磯島家、そして敬一郎は安川家の養子となった。敬一郎の次男・健次郎は松本潜の養子として松本家を継いだ。【付図1 安川・松本家系】

松本潜の祖父・松本平内が幕末福岡藩の石炭専売の「仕組法」を献策し、芦屋会所であたっていたこともあり、潜と徳の兄弟は、明治の家禄

制の廃止に際して稼業として炭鉱業に始めた。徳が佐賀の乱（1874年）で戦死すると、慶応大学で学んでいた敬一郎は学問の道を諦め、炭鉱業を継いだ。松本潜・安川敬一郎兄弟は、採炭業のみならず石炭販売の営みを重視した。このために、その住居は販売店に接して移動した。1877年に遠賀川河口の芦屋に初めて石炭販売の安川商店を開業すると、鞍手郡長谷から芦屋に転居した。商店は昔に因んで「会所」と呼ばれた。若松築港会社が創立（1890年）され、鉄道が開通（1891年）して筑豊炭の積出港が芦屋から若松に移るのを見越して、86

年に本店、89年に住居を若松船頭町に転じた。日露戦後、専門学校創立と明治紡績建設のための用地を対岸の戸畑に求め、住居も戸畑に新築した。1910年12月15日に「転宅披露」を催した。1918年に敬一郎が引退すると、翌19年末には明治鉱業の新社屋が建築されて戸畑に移ってきた。安川・松本の社業と生活は戸畑を拠点とした。

1906年から金子辰三郎（金子堅太郎の実弟）の斡旋で戸畑用地を買収し、明治専門学校（敷地78,716坪）と両家住宅を新築（安川邸敷地10,589㎡、松本邸12,540㎡）するために、安川松本商店臨時建築部（1907～1913.6末解散）を設けた。1908年に入ると、敬一郎旧知の平賀義美の紹介で、住友臨時建築部から久保田小三郎を建築部主任に迎えた。設計は辰野金吾が主宰する辰野片岡事務所が担当し、久保田の関



【図4 安川・松本家住宅現状図】参考文献12、P.31

●安川氏の轉宅披露
 本邸安川清三郎の隣氏は過般來戸畑町字中
 原へ轉宅せしに付き來る十五は午後九時よ
 り若松石炭會俱樂部に於て右轉宅披露の宴
 を張る由

【図3 転宅披露（門司新報 1910.12.14）】

係で、住友時代の相原雲樂・木内真太郎などが内装にあたり、鴻池組社員が出向して施工部門が組織された。住宅・内装・家具の様式を特徴づけるアール・ヌーヴォーは、こうした人々によって創り出された。

安川・松本家建築年表

西暦	A	B	C	D	E	F	G	H	備考
	建築区分								
	居住者	松本健次郎	安川度	敬一郎・清三郎・寛	敬一郎・清三郎・寛	敬一郎	安川第五郎		
1877年	建物の種類	洋館	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年安川商店 建築
1888年	明治10~21年	日本館	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年安川商店 建築 明治10年松本商店 建築 明治10年明治病院 開設 明治10年明治畜産 開設
1900年	明治22~40年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1901年	明治42年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1911年	明治44年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1915年	明治46年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1918年	明治48年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1920年	明治50年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1925年	明治55年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1927年	明治57年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1929年	明治59年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1934年	明治64年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1935年	明治65年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1936年	明治66年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1937年	明治67年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1938年	明治68年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1946年	明治76年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1952年	明治82年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1958年	明治88年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1963年	明治93年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1968年	明治98年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1971年	明治101年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1976年	明治106年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1984年	明治114年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1989年	明治119年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1994年	明治124年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
1999年	明治129年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設
2001年	明治131年	洋館上棟	住宅(洋館)	本邸	大邸敷	住宅	日本館	洋館	明治10年明治畜産 開設 明治10年明治畜産 開設

【図5 「安川・松本家建築年表」 参考文献12

(1) 旧松本家住宅



【図6 松本健次郎】

旧松本家住宅は、松本健次郎（1870～1963）が自分と家族の住宅と明治専門学校の迎賓館を兼ねて建てたものである。洋館と日本館を併せ持つ典型的な明治時代の上流住宅である。洋館は建坪1,100㎡（現状）の木造二階建・スレート葺、日本館は建坪730㎡（同）の木造一部二階建・瓦葺で、洋館とは渡り廊下でつながっている。

洋館一階には大広間（162.9㎡）、客室、食堂、書斎など大小7室（延208.4㎡）が配置され、大広間から階段室を経て、二階へ上る。二階は階上広間を囲むように大小7室（延208.4㎡）の寝室と和風座敷3室（18畳、9畳、8畳）が配置されており、附庇及び突出部には内玄関、厨房などがある。



【図8 洋館】

(注) 以下図8～19、22～25、28、29は著者清水撮



【図9 洋館1階広間】



【図10 洋館1階食堂】



【図11 洋館1階書斎】



【図12 洋館2階和室】



【図13 洋館2階寝室】

日本館は雁行する二棟から成り、一階は車寄せのある玄関、中央書院（8畳、次の間8畳）、入側（17畳）付の大座敷（13畳、次の間10畳）などが、二階は板の間（8畳）の書斎をはさんで東座敷（8畳、次の間6畳）、西座敷（8畳、次の間6畳）、納戸などが配置されている。設計は、臨時建築部主任の久保田による。



【図14 日本館】



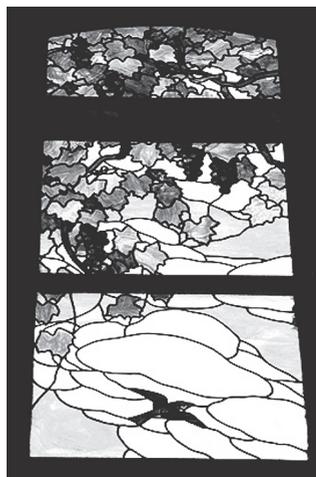
【図15 日本館中央書院】

旧松本家住宅の特徴は洋館にあり、外観、室内意匠、家具などもアール・ヌーヴォー様式の影響を受けてデザインされていることである。外観は一階部分を水平の目地を切って石造に模した大壁造とし、クラシック風の縦長窓をつけ、二階は木骨を化粧にしたアール・ヌーボー風のハーフ・ティンバーの手法でまとめている。出隅、入隅の多い非対称的な様式が、切妻、寄棟切上げ、あるいは円弧状と、変化に富んだ組み合わせの急勾配の屋根と相俟って、まことに華麗である。

室内意匠もH型と円形を組み合わせた各室出入口の構成、鋭角的デザインの照明器具を中心に、あるいは放射状に、あるいは柵形に区画し、細幅板を張り合わせた天井、それぞれ手法の異なる装飾を用いた暖炉などの部分にアール・ヌーヴォーの特色がよくあらわれている。とくに大広間の階段室窓の和田三造



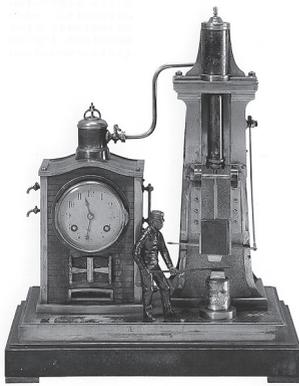
【図17 タピストリー】



【図16 ステンドグラス】

による青空を背景に葡萄が茂る明るい図柄のステンドグ

ラス、階段踊り場の両側に懸けられた「海の幸」「山の幸」という一対のタピストリー、階段前のゆるやかなアーチ形^{のき}楯を架けた列柱、食堂の出入口上部に掲げた金色多弁アーチ形の中にこれも和田三造による樹木鳥図の描かれた額絵、つくりつけ食器棚のあるシンメトリックな構成の西壁面などは、多彩にして大胆なデザインが、完璧なバランスと緻密



【図18 置き時計】

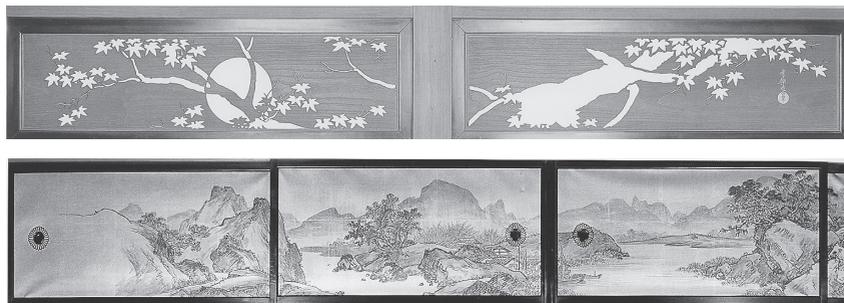
な技術によってまことに見事なおさまりをみせている。わが国におけるアールヌーヴォーの影響を受けたインテリアとしては最も水準の高いものといえよう。また二階和風座敷の場合も、棚の中へ暖炉をはめこみ、周囲は高島北海の日本画による貼付壁で囲んでいる。このように和室に暖炉を備えるということ自体は明治時代に多く行われた方法だが、ここに北海を使ったことや、棚板にかすかにカーブをつけたり、暖炉庇を円弧形のデザインに

したりすること、そして全体の平面分割の巧みさといった手法は独特のものである。アール・ヌーヴォーをこれほどうまくこなしている例は他にないばかりでなく、洋風住宅としても、この旧松本家住宅はその意匠力と施工技術の高さにおいてわが国では最高水準にあるものといえよう。(以上は小泉和子の評価)

洋館の家具や内装に、それまでほとんど使われたことがなかったナラ材(オーク材)が使われ、「和風指物の技法」によって、欧米のそれとはひと味違う日本的な風格を持っている。デザイン力の高さと同時にこれを支える緻密にして確かな指物技術も見逃せない。その指物師が相原雲楽である。ヨーロッパでの流行と同時代的に、日本における建築分野でアール・ヌーヴォーが取り入れられるようになるのは1901年からで、東京帝国大学工科大学造家学科を卒業した武田五一がさきがけとなった。その後野口孫市、日高胖ゆたからによって盛んにアール・ヌーヴォーの導入が行われ、住友銀行川口支店、横浜銀行集会所、鶴崎平三郎邸、神本理髪店、旧日本毛織本社などが建てられた。辰野が顧問をしていた住友本店臨時建築部(1900年6月に住友銀行本店建築のために設置、初代の顧問は官営製鐵所本事務所を設計したと云われる山口半六、山口病没後の1901年6月に辰野が顧問、技師長に野口孫市、技師は日高胖ゆたか)は、アール・ヌーヴォーの拠点ともいえた。

辰野が設計をした旧松本家住宅の建築のため、住友にいた久保田が監督として招かれた。高村光雲の弟子の雲楽は住友家須磨別邸（1903年）の洋風室内装飾の彫刻を手掛けたことから、住友臨時建築部の仕事をすることになり、松本家住宅の室内装飾や指物の製作を受け持つことになった。ステンドグラスの原画は、健次郎が留学資金を援助した関係で和田三造が描いたが、その製作は住友建築部にかつて在籍し、独立後は辰野の仕事を共にしていた木内真太郎が担った。こうして見ると、松本家住宅の室内装飾・家具を含めた建築は、辰野と住友建築部グループのアール・ヌーヴォーつながりによる作業であったといえる。なお、久保田は松本家住宅の直前に、鴻池組本店（1909年10月上棟、洋館、アールヌーヴォーの意匠）と鴻池組本宅（同年11月、日本館）の設計を手掛けており、アール・ヌーヴォーの意匠は雲楽であった。松本家住宅の施工に際して、鴻池組社員が外向してきたのは、こうした関係によるものといえる。

旧松本家住宅とアール・ヌーヴォーとの関連を示すものが他にもある。洋館和室襖絵・日本館玄関衝立を描いた高島北海（1850～1931）である。北海は幼時から画才に恵まれていたが、工部省鉱山寮の技師であった。1885年から88年にかけてナンシーの国立森林高等学校に留学した。この時、彼は標本図を描くと同時に日本美術を紹介した。これがアール・ヌーヴォー、ナンシー派のガラス工芸家エミール・ガレなどに大きな影響を与えたといわれる。日本の美術では草花や昆虫などといった自然の小さなものを素直に表現するが、彼等は北海



【図19 洋館和室襖絵】

を通してこれに気付き、それがアール・ヌーヴォー、ナンシー派特有の装飾意匠を生むきっかけとなったという。なお、旧安川家住宅の敬一郎所蔵品にも北海が描いた花卉の掛軸二幅（1913年）が残されている。

こうしてみると、松本家住宅の洋館は、まさに「アール・ヌーヴォーの館」と呼ぶに相応しい国内では唯一の建物（藤森照信、小泉和子、足立裕司など）であり、きわめて貴重な歴史的建造物といえる。

【注】旧松本家住宅の歴史的建築物としての価値は国重要文化財に指定された際（1972年）の「指定説明」が要領を得ているので、それで確認しておく。現在の建物は、指定後の1981年1月から翌年9月まで修理工事がなされ、公募による指定された一般公開と西日本工業倶楽部として運営されている。指定説明（漢数字を数字に変更）

「旧松本家住宅は松本健次郎氏の住宅として、明治42年にまず日本館が建設され、翌年洋館の建設に着手、明治44年に竣工をみた。洋館の建設は、自己の住居かたがた、明治専門学校の迎賓館として利用しようと計画されたもので、辰野片岡建築事務所が設計している。この住宅は第二次大戦後昭和27年まで進駐米軍に接收され独身将校宿舎に使用されたが、昭和27年以後は西日本工業倶楽部が松本氏から譲渡をうけ、倶楽部会館に利用している。

洋館は木造二階建て、外観は一階部分を石造に模した大壁造とし、二階は木骨を化粧としてハーフチンバー風にもせる。屋根は寄棟や切妻を交差し、また軒を弧状に切りあげるなど変化をつけ、屋根窓を多用する。内部は一階が広間、食堂、書斎などになり、二階は主に寝室になる。二階南西隅には主人の部屋として床柵付の一八畳室、九畳室、八畳室の日本間三室がある。この洋館では意匠上円弧や曲線を豊富にとりいれており、アールヌーボーの影響が認められる。日本館は当初、一階建として計画されたが、のちに健次郎氏子息の幹一郎氏の結婚により二階建として増築している。

洋館との渡廊下を境に東部、西部にわかれ、東部には大広間がある。この日本館は当時の上流階級の住宅として規模は大きなものであり、洋館と共にほぼ旧状のまま現存していることが重要であって、明治時代の和洋併用の生活を知る好資料である。なお、一階西部は現在従業員居室に利用され変更もうけているので、この内部は指定範囲から除くものとする。

旧松本家住宅は明治時代末期の上層階級の住宅として、同じ建設年代の洋館・日本館が現存する数少ない遺構であり、また洋館は明治時代末期アールヌーボーの影響をうけた好建築である。」

(2) 旧安川家住宅

旧安川家住宅は、明治末年の建築を伝える旧松本家住宅と異なり、親（敬一郎）・子（清三郎）・孫（寛）と三世代で増改築を行い、その構成の変化が大き



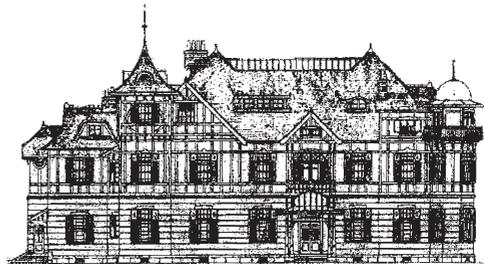
【図20 安川敬一郎】

いところが特色である。この変化は、世代交代にともなって三期に分けることができる。旧安川家住宅の調査にあたった日隈康喜の報告書によって整理する。

敬一郎を施主とし、臨時建築部の久保田が設計した安川邸（1911年4月上棟）が第一期である。敬一郎は、この建築にあたって当初は辰野葛西事務所に設計を依頼した。しかし辰野の洋館は採用されず、平面構成が踏襲された。この「実現しなかった西洋館」は、『建築工芸叢誌』

に掲載され（1912年）、その姿を伝えている。

第一期の建物は、①洋間・和室混在の第一次本邸（1937年に二階建部分は移築され「明治鉱業倶楽部・猶興館」（戸畑市竹下町）で、一階は椅子座の接客空間、二階は私的空間として床座の居住空間であった、②若松から移築した和風建築の大座敷（平屋69坪）、③平屋の和風建築の第一次居宅、④大壁造の蔵2棟からなっていた。つまり4つのブロック



【辰野金吾設計の安川邸西洋館建築図】参考文献12、P.60



【図21 明治鉱業倶楽部（昭和12年）】

からなり、北側に接客、南・北東部に居住、南西部にサービス・エリア、北西に蔵を設け、各エリアを畳廊下、渡り廊下で繋いでいた。

接客、居住、サービスエリアと機能的に分離し、それらを何棟か建て連ねる武家住宅風の構成をとっていた。伝統的な書院造を思わせる建物を継承しつつ随所に洋風要素を採用した和風住宅といえる。



【図22 (現状) 安川邸大座敷】

敬一郎隠宅の洋館である第二次居宅が第二期である。清水組が設計建築にあたり、26年11月に上棟、翌27年6月に竣工した。この時期、第一次本邸は清三郎邸として使用された。第二次居宅の東側・南側正面は、パラペットを立ち上げた屋根と石造を模した腰壁と縦

長窓から成る洋風の外観を伴い、内部の居室もほとんどが洋間とされた。ただし、居間の2室は和室が配され、外観も北側一階は和風とされ、西側は和風の外観をもつ平屋建てが付され、全体は和洋折衷の趣を呈している。



【図23 (現状) 安川邸蔵】

1937年5月に、第一次本邸跡に洋館の第二次本邸が着工した。施主は安川寛で、これも清水組が担当し、翌38年11月に完成した。これが第三期である。「起りをもつ瓦葺の寄棟屋根を戴き、煙突と屋根の変化によってピクチャレスクな外観を呈

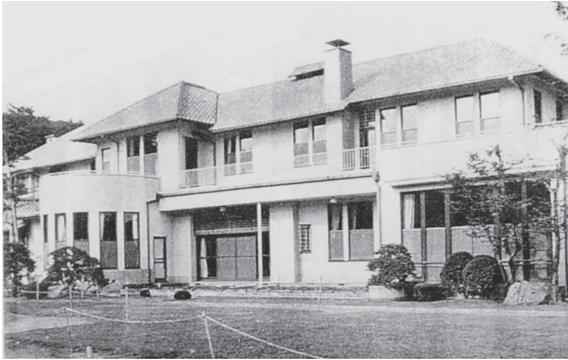


【図24 (現状) 安川邸第二次居宅】

しながらも、木造による陸屋根やテラスの採用に及び、モダニズムを加味した近代建築」であった。この第二次本邸の平面構成は、南側に半円状に迫り出した食堂と、床上げされた台所に大きな窓を連続させ、開け放った広い居間や南面の庭園に開かれた夫人室を配し、さらにサンルームやテラスを設けた清潔で健康的なイメージの住宅で、戦後に導入される近代化を逸速く達成した住宅であった。こうした構成は、第二次本邸（明治末期）における西端に配された土



【図25 第二次本邸玄関（現状の玄関棟）】



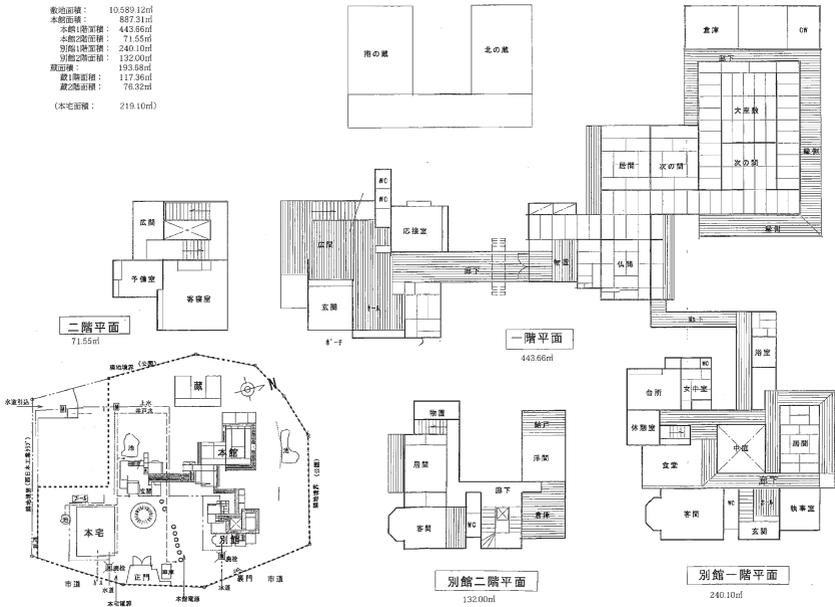
【図26 第二次本邸南面】

間の料理場や、二階東側に設けられた控えめな露台、住宅の中心部を占めた大食堂と談話室に対して、これらに替わる機能性と快適性を求めた合理的な配置が窺え、近代工業を開拓した近代の企業家に相応しい建築と言えよう。ただし、第二次本邸の外観における近代化の追求が、木造による陸屋根やバルコニーの採用に及び、合理性の追求の点では大壁の採用や突板練付けさらにフラッシュ扉の採用にも及んでいる。この挑戦的ともいえる試みの結果、雨漏りの危険性が増し、部材の耐久性が弱まり、建物の寿命を縮める結果になった。

当初の和風を基調とした第一期、和洋館折衷の第二期、洋風を基調とした第三期と推移した。ここに、近代の企業家住宅としての建物の基本的構成が整った明治末期の安川家住宅から、大正末期における洋風要素の摂取、昭和前期におけるモダニズム志向という建築構成の変化を見ることができる（日隈）。

こうした三世代によって建築された旧安川家住宅は、現状では、①明治中期に建設され移築された大座敷（若松時代の旧安川邸）と明治末に建設された蔵2棟、②大正末期に建設された第二次居宅洋館、③昭和前期に建設された第二次本邸の玄関棟、平屋建ての数寄屋風建築と渡り廊下が残っており、安川家住宅の特色である建築と生活様式の推移を窺うことができるものである。

清水憲一：旧松本家・安川家住宅について —— その建築的価値と日本を代表する地方財閥 ——



【図27 現状の平面図】安川電機提供資料



【図28 門扉】

明治の貴紳による大邸宅は「60畳以上の居室を有し、和洋二館を並立し、和館部の坪数が170坪を越えるもの」(木村徳国)といわれている。また、炭坑主の住宅(典型は貝島六太郎邸)は、明治中期のほとんどが平面構成が塊状であったのが、明治後期には接客と居住の機能が混在しながら分散していき、大正期には居住部分の拡充が図られつつ機能が明確になっていった(川上秀人)。日本の貴紳・炭鉱主住宅と比較したとき、安川家住宅は次のように評価される。

明治末期の安川家住宅の構成は、辰野・葛西設計の「西洋館」の平面構成を踏襲しつつ和風で建設された第一次本邸に、伝統的な接客空間を遺しつつ和風を基調とした建築構成とされた。しかし、その変化を考察すると、明治初期の皇族邸宅に見られる洋風を主体とした和・洋館を併設する構成から、和館を主体とする構成へ変化したこの時期の皇族・華族住宅の変遷に、共通する部分を見出すことができる。しかし、伝統的な書院造を継承する点では、皇族・華族住宅と異なる点が見られる。その伝統的な書院造を持つ住宅について、炭鉱主の住宅をはじめとする企業家住宅との比較では、玄関を中心に接客空間、居住空間、サービスを分離し、何棟か建て連ねる形式を採用する点や、椅子座を採用した部屋に格天井といった和洋折衷技法の採用など共通する点が多い。しかし、安川家住宅第一次本邸の居住空間で、大規模な二階建て、独立階段室、



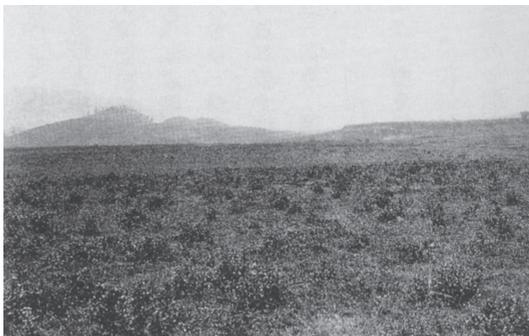
【図29 第二次居室内内】

露台などの建築形式を採用する点や椅子座と床座を上下に使い分ける生活様式に違いが見られた(日隈)。

安川・松本家住宅のユニークさは、65畝という宏大な用地を利用して、いわゆる「ユートピア明専村」を建設したところにある。

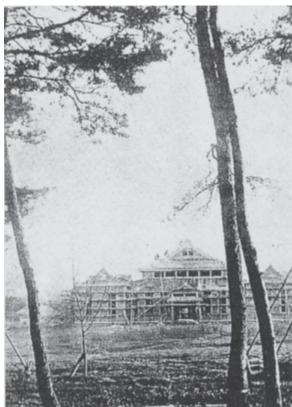
1907年4月、安川は健次

郎・清三郎をともなって戸畑中原の山林・原野を踏査し、「其風致壮快開潤且原野の私立学校敷地に好適すべきを認め」、金子辰三郎に買収を斡旋した。この用地は「余りに其広漠たるため」、設計を担当する建築家辰野も「其位置の選択（学校をどこに建設するか）に迷ってしまった。



【図30 開発用地】

（注）図30～34、42は九州工業大学百年史編纂委員会による



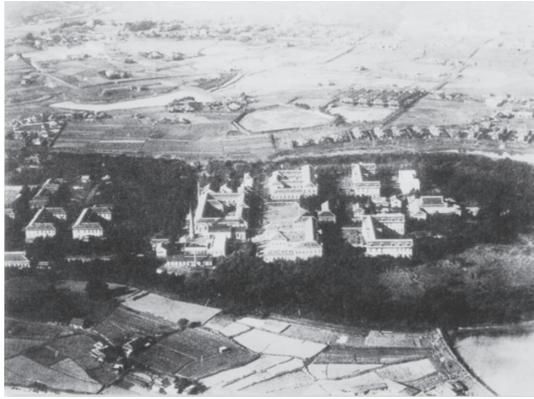
【図31 建設中の本館】



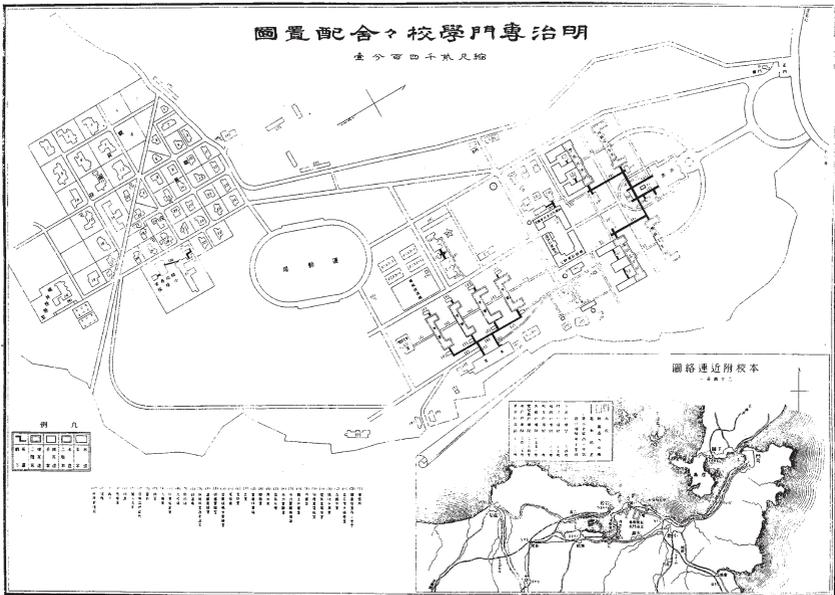
【図32 辰野設計の完成した本館】



【図33 明治専門学校校舎宿舍全景】



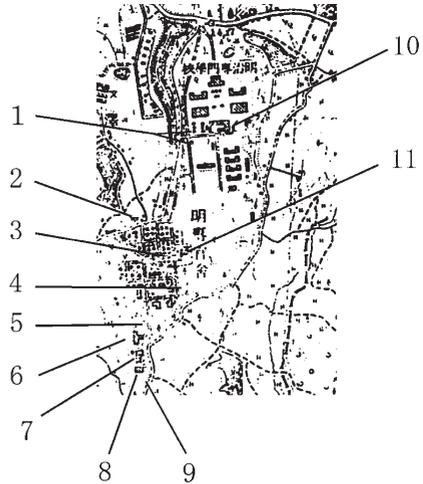
【図34 明治専門学校全景（昭和4年頃）】



【明治専門学校々舎配置図】

明治末から、明治専門学校を始めとする諸施設と安川・松本家住宅が同時に建設された。辰野設計による専門学校の学寮（1909年1月）、本館（同3月）がまず完成し、続いて食堂、演武場、各学科教室が整った（10年9月）。同時に、「町内」をなす1万坪の生活空間（役宅地）に、まず教職員住宅49棟69戸、そして学校関係者の子弟が通う明治尋常小学校が建設された。この空間には、日用品供給所、医局、中原郵便局、農園、牧場、ゴルフ場、ゲートボール場、テニスコートが設けられ、水道を完備し、明専構内にガス発生所、石炭火力発電所を設置して「町内」に供給した。

こうした教育・運営における生活共同体的な「ユートピア」が実現された背景には、安川の儒教思想をバックボーンとした経営家族主義という経営理念を指摘することができる。



1. ガス工場
2. 日用品供給所・中原郵便局
3. 医局
4. 職員テニスコート
5. 農園
6. ゴルフ場
7. 安川邸
8. 松本邸
9. 牧場
10. 発電所
11. 明治尋常小学校

【図35 ユートピア明専村】

2. 安川・松本の事業経営

安川・松本父子の事業展開が家業の炭鉱・販売業によって麻生・貝島と並ぶ「筑豊御三家」をなすとともに地方実業家・利害調整者として地方工業化の基幹部門の経営・投資家として資産形成を行い、それが専門学校・自宅新築を含む「ユートピア明専村」の実現と経営多角化の資金源を生み出し、そのことを通して明治末年には全国的に代表的な「地方財閥」に転じていった。

福岡藩の「微臣」であった安川・松本は、「最初家政を維持し子弟を養育するの資に充てむが為の窮策に過ぎざりし」炭坑開鑿に踏み出したのは1871年のことであり、その4年後に次兄幾島徳が戦死すると敬一郎は東京での学問を中断して炭鉱業に従事した。小炭坑は機械化できず姑息的な採掘であり、「地方小資本家の信用に依頼」することで息を継いでいた。その出発は、「糟櫃の間に雌伏を嘆ずるの外なかりき」状況であった。

1880年代半ば、「最初の事業発展期」(松本)を切り開いた。相田鉱区を拡大し、勢田を買収し、赤池炭坑の共同経営に乗り出した。販売を強化するために安川商店を若松に移転して本店とし、神戸、大阪、門司にそれぞれ支店を設置した。阪神炭商との取引により、「文明的開鑿」を始め、



【図36 若松支店】
(注) 図36～41参考文献13

め、筑豊で最初のダイナマイト掘削を導入した。1890年頃、所有する大城・相田・伊岐須・赤池は筑豊では「大炭坑」となり、「我炭坑は少しく目を惹くに至った」。また、この時期、(筑豊)石炭坑業人組合の認可を坑主代表として願し、地域の業界を代表する顔をもつようになった。

ところが、日清戦前の1892・3年不況が襲うと、採炭は半減し、「炭坑維持に汲々」とし「ほとんど倒産的窮境」に陥った。この苦境に、松本健次郎は留学を中断して販売を担当した。販売費に占める川舩輸送費の大ききから、「唯一妻の望は鉄道開通運炭費の軽減」に托した。

安川は、三菱資本を導入して筑豊鉄道会社の改革と自らの炭坑への開通に奔走した。93年、既に開通していた若松―直方に接続して金田まで延長し、赤池炭の鉄道輸送が可能となった。

1894年に勃発した日清戦争は、石炭需要増大のブームをもたらし、経営難から脱出した。日清戦後の産業革命の展開がエネルギー源の石炭需要を約束した。この期に安川は、大阪資本と提携して明治炭坑株を設立し、採炭を拡大していった。筑豊において真っ先に納屋制度（99年）、炭坑札（1900年）を廃止し、労資関係の近代化も進めた。明治炭坑株は「優良株」と評価された。会社とは別に安川・松本は、



【図37 神戸支店】

高雄炭坑を官営製鐵所に譲渡し（1899）、共同経営の田川炭坑を三井に売却した（1900年、後の三井田川炭鉱）。こうした譲渡益もあって、配当優先を経営方針とする大阪資本から株式を買い戻し、会社を解散して個人経営とした（1902年、明治第一・第二・第三・赤池坑）。



【図38 大阪支店】



【図39 門司支店】

日露戦時・戦後の需要激増によって炭坑経営に「確乎不拔の自信」をもつにいたった。採炭とともに販売においても、三井・三菱の財閥に次ぐ地位を確立した。麻生、貝島と共に「筑豊御三家」と称された。1906年9月、三井銀行に返済した手形で総ての負債を償還し終えたことは、安川の「自信」の証明であった。

日露戦争の「僥倖」を謳歌している中、「不運」が襲った。「勿頸の友」平岡浩太郎が病没し（1906年10月）、当時最大の死者365名を出したガス爆発（07年7月）後の豊国炭坑を引き継ぎことになった。この買収には炭坑復旧を含め285万円が見積もられ、「再び莫大な債務者」に転じた。このために必要な資金を確保するために、資本金500万円の明治鉱業株式会社合資会社を設立した。三菱系金融機関からも65万円の巨額融資を得た。豊国炭坑の復旧は予想を上回るテンポで進み、出炭は明治鉱業の稼ぎ頭となった。同社は、第一次大戦ブームを謳歌すると、19年には資本金2,000万円の株式会社に改組し、戸畑の新社屋に移転した。第一次大戦中には、安川は財閥を除くと全国第1位の「鉱業資産家」となった。



【図40 額田本社（1902）】

炭坑主安川は、炭鉱・鉄道・港湾という地域におけるインフラ整備とも深く関わり、地域実業家の側面をもっていた。筑豊鉄道（'89創立、100万円）には創業当初から関係していたが、会社が資金不足で頓挫していると、三菱に働きかけて資金調達と役員刷新によって立て直しに貢献した。安川は会社役員となり、鉄道開通後は会社は順調に発展した。97年には九州鉄道と合併した。合併後の九州鉄道は拡大路線を進めた。利益の配当優先を求める株主との紛争が生じると（99年）、安川は会社役員として財閥、株主などの利害調整に奔走した。

筑豊炭を積み出す港湾整備をめざす若松築港会社（89年創立、60万円）も90年恐慌で株式募集難になると、筑豊鉄道同様に三菱に働きかけ工事を再開した。96年に安川が社長に就任すると、官営製鉄所の八幡誘致に奔走し、立地後の港湾拡張では、必要資金200万円の内半分の100万円を国庫補助、残りを財閥と地元炭鉱主の負担とし、この実現のために日時を費やした。

こうした中で安川は、政治家（井上馨など）、官僚（和田維四郎、古市公威など）、財閥の三菱（荘田平五郎、岩崎弥之助）、三井（益田孝）、古河、そして東京財界（渋沢栄一、大倉喜八郎、浅野総一郎など）と強いパイプを築いた。後年、安川・松本が全国的な活動を展開する基盤となる。

【表1 安川炭鉱経営総括表】

	鉱区数	坪数	出炭量	(畑田/高野)	(赤池)	(大城/伊治)	(豊国)	職員	鉱員	資本金	払込	損益	配当率(%)
1883 (M16)	3	8,170	510										
1886 (M19)	6	186,486											
1890 (M23)				30,393	8,715								
1891 (M24)					58,893								
1892 (M25)					31,404								
1893 (M26)				43,296	87,358								
1894 (M27)	4	576,972		96,774	139,313	94,590							
1895 (M28)	8	2,160,029	437,661	173,658	159,373	94,052							
1896 (M29)				132,344	146,404			63	1,056				
1897 (M30)				164,480	165,603	58,715		225	1,750				
1898 (M31)				157,775	176,762	161,266							
1899 (M32)	15	3,586,620	507,068	154,730	207,130								
1900 (M33)	14	2,879,609	378,181	154,547	279,676								
1901 (M34)	16	3,332,298	549,268	171,607	397,471								
1902 (M35)	18	4,053,151	587,546	196,679	412,139			243	2,472				
1903 (M36)	19	3,804,651	450,000	192,210	454,285								
1904 (M37)	15	4,214,472	599,774	199,880	448,545								
1905 (M38)	17	4,884,537	598,231	190,768	431,842								
1906 (M39)	12	4,800,409	756,079	161,853	393,433								
1907 (M40)	14	5,803,625	366,668	158,593	412,247								
1908 (M41)				173,578									
1909 (M42)				733,193	163,785								
1910 (M43)	17	6,640,921	859,991	177,950	387,116								
1911 (M44)	16	5,831,791	1,051,429	195,796	494,742								
1912 (M45)				1,186,887	191,016	541,701							
1913 (T 2)				1,125,893	220,979	474,828							
1914 (T 3)				1,036,201	146,178	491,089							
1915 (T 4)				1,140,878	112,433	442,403							
1916 (T 5)				1,251,628	129,709	435,040							
1917 (T 6)				1,174,704	101,170	417,145							
1918 (T 7)				1,133,407	128,651	372,098							
1919 (T 8)				1,073,745	149,534	280,940							
1920 (T 9)				1,017,293	146,126	244,641							
1921 (T 10)				1,073,218	144,817	228,827							
1922 (T 11)				1,505,948	151,651	228,678							
1923 (T 12)				1,455,935	202,242	221,103							
1924 (T 13)				1,482,833	259,322	252,112							
1925 (T 14)				1,516,010	358,532	269,645							

(注) 鉱区・出炭のM40までは『鉱区一覽』を集計したもの。『明治炭坑』については『北九州市史』、単位は(円)、*印は半期。M41以降は『社史』、単位は(千円)、配当の左は上期、右は下期。

【表2-1 若松石炭商取扱】

	三井	三菱	住友	古河	安川	(%)	貝島	麻生	合計
1900	490,360	448,918	226		294,851	14.5%			2,032,330
1901	523,602	491,359			282,249	10.4%			2,720,448
1902	499,882	464,034	30,624		283,006	8.6%			3,302,695
1903	607,751	525,799	23,357	262,623	364,607	9.5%			3,826,688
1904	843,878	523,284	25,499	299,731	363,906	9.2%			3,974,254
1905	1,030,078	518,103	14,705	281,379	291,811	6.9%			4,199,165
1906	1,438,824	503,073	61,845	295,142	517,312	11.4%		1,434	4,534,398
1907	1,682,103	714,342	34,498	381,140	483,797	9.4%		6,592	5,125,447
1908	1,932,492	802,175	81,826	347,674	529,898	9.6%		13,029	5,504,363
1909	1,841,602	757,553	148,830	276,140	507,018	9.6%		22,035	5,273,721
1910	1,795,751	914,620	155,751	328,361	499,161	9.1%		24,871	5,516,386
1911	1,981,208	1,057,177	165,476	441,248	609,605	9.7%		25,741	6,260,777
1912	2,137,260	1,477,274	213,623	455,059	605,756	8.6%		24,745	7,053,635
1913	2,440,604	1,489,891	203,430	615,286	555,135	7.2%		27,484	7,684,552
1914	2,287,859	1,424,789	204,542	681,165	588,816	8.2%		49,434	7,203,824
1915	1,983,427	1,274,938	217,384	693,401	547,295	8.3%		41,770	6,605,281
1916	2,012,808	1,283,646	193,004	730,628	619,459	8.6%		69,663	7,237,125
1917	1,931,546	1,233,658	189,417	734,310	617,894	8.2%	32,134	130,131	7,580,647
1918	1,536,569	986,831	150,236	651,886	514,567	6.8%	57,939	162,096	7,529,357
1919	1,512,539	834,985	150,215	603,863	481,258	6.1%	104,488	180,141	7,856,000
1920	1,168,284	784,818	185,882	556,162	452,953	6.3%	257,795	187,365	7,242,246
1921	1,015,813	813,968	168,138	521,057	479,475	6.5%	559,084	246,219	7,380,698
1922	963,307	816,678	192,257	417,762	456,055	6.0%	658,267	204,682	7,560,261
1923	959,914	949,453	212,449	355,512	502,832	6.6%	733,576	197,571	7,592,610
1924	997,311	1,140,235	194,422	423,362	613,828	7.5%	824,734	298,951	8,173,413
1925	1,008,552	1,421,971	181,629	413,982	597,198	7.1%	930,023	293,027	8,406,598
1926	1,012,892	1,360,548	186,527	415,530	577,846	6.7%	1,026,945	308,656	8,660,493
1927	924,377	1,156,478	199,350	432,838	570,878	6.7%	1,036,403	272,140	8,520,888
1928	913,868	1,173,590	202,876	387,499	551,504	6.8%	1,070,408	278,566	8,135,431
1929	992,347	1,274,499	216,855	471,721	631,366	7.5%	1,043,674	394,937	8,392,805
1930	955,263	1,121,496	243,904	419,750	582,544	7.6%	897,535	490,226	7,644,132
1931	748,012	847,769	208,583	363,085	555,874	8.6%	727,533	421,111	6,498,756
1932	844,874	940,416	220,511	461,474	543,023	7.7%	822,128	442,140	7,097,046
1933	1,025,304	1,153,668	242,288	587,191	647,561	7.7%	982,263	496,404	8,403,440
1934	1,090,753	1,226,371	253,893	680,789	704,446	7.8%	1,128,645	503,485	9,010,436
1935	1,256,576	1,220,019	271,190	700,579	659,974	7.0%	1,164,313	523,158	9,395,834
1936	1,380,123	1,313,299	272,995	794,614	718,838	6.8%	1,312,431	594,001	10,552,959
1937	1,482,953	1,327,362	160,049	784,954	813,002	7.5%	1,350,637	640,540	10,874,636
1938	1,499,378	1,327,623	318,721	812,092	803,726	6.9%	1,462,051	662,248	11,703,380
1939	1,538,286	1,176,590	251,029	832,640	783,952	6.3%	1,306,020	634,015	12,485,650

若松石炭商組合資料による。

【表2-2 門司石炭商取扱】

	合計	三井物産	三菱	古河	安川松本 (%)	貝島	麻生	山下	巴	大橋
1896 (M29)	1,256,641	174,287	176,232		288,062	22.9%				
1897 (M30)	1,983,999	259,875	237,875		293,886	14.8%				
1900 (M33)	3,069,727	605,708	470,437	122,971	389,860	12.7%				
1901 (M34)	3,605,905	851,233	671,116	120,494	245,820	6.8%				
1904 (M37)	4,049,538	1,307,896	868,078	354,192	325,826	8.1%				
1910 (M43)	3,012,783	1,268,621	377,840	120,516	389,088	12.9%			55,549	40,579
1911 (M44)	2,849,683	1,127,827	356,508	184,265	356,508	12.5%			57,641	37,284
1915 (T 4)	3,923,469	692,284	383,503	46,017	230,753	5.9%		80,208	32,184	854
1917 (T 6)	2,333,245	593,069	228,691	85,669	190,646	8.2%		132,769	60,802	18,106
1918 (T 7)	2,162,538	534,246	225,674	91,180	147,667	6.8%		189,449	112,593	48,420
1919 (T 8)	2,614,969	562,271	228,302	80,186	123,017	4.7%		189,454	93,183	103,262
1920 (T 9)	2,389,613	495,007	253,785	73,726	93,852	3.9%	4,144	174,772	82,895	75,468
1921 (T10)	2,177,461	557,402	202,444	57,456	56,757	2.6%	70,178	136,279	118,055	34,766
1922 (T11)	2,068,062	508,940	202,023	57,512	53,394	2.6%	117,574	28,171	86,380	33,789
1923 (T12)	2,075,227	559,984	249,429	48,698	42,816	2.1%	78,812	46,310	52,583	45,613
1924 (T13)	2,206,745	574,526	276,756	79,249	56,283	2.6%	108,914	19,987	46,449	69,686
1925 (T14)	1,750,451	470,621	226,452	75,516	48,059	2.7%	72,529	11,741	46,237	28,028
1926 (T15)	2,272,536	601,829	311,987	100,855	59,848	2.6%	90,681	14,698	106,457	46,156
1927 (S 2)	2,214,170	583,140	285,604	99,086	53,115	2.4%	84,053	11,473	127,706	63,428
1928 (S 3)	2,153,269	541,276	285,638	87,640	70,614	3.3%	102,704	11,798	142,034	51,496
1929 (S 4)	1,954,938	436,475	275,291	69,766	106,374	5.4%	79,196	5,293	129,890	41,808
1930 (S 5)	1,573,220	346,393	223,958	70,582	59,958	3.8%	60,116	7,932	117,097	51,391
1931 (S 6)	1,151,879	258,144	193,940	61,684	40,511	3.5%	55,722	3,807	69,100	22,690

『筑豊石炭鉱業組合月報』、『門司石炭商同業組合統計年表』などによる。

【表3-1 筑豊鉱区・採炭M41資本別集成型】

	鉱区数	鉱区坪数	採炭坑数	採炭(M40)
三井	16	14,798,146	13.1%	3
三菱	10	9,876,893	8.7%	4
古河	10	2,977,171	2.6%	3
住友	2	1,071,154	0.9%	1
製鐵所	1	2,891,787	2.6%	1
海軍	2	3,740,295	3.3%	1
安川	14	5,803,625	5.1%	3
貝島	12	8,085,776	7.1%	4
麻生	12	3,631,895	3.2%	2
小計	79	16.5%	52,876,742	46.6%
合計	478	100%	113,357,310	100%

『筑豊五郡石炭採掘鉱区一覧表』(M41.6.30現在)による。

【表3-2 筑豊石炭業における安川】

1	大之浦	貝島	714,776
2	三井田川	三井	406,406
3	明治	安川	358,320
4	目尾	古河	354,414
5	新入	三菱	345,613
6	金田	三菱	248,071
7	鯨田	三菱	219,086
8	海軍御徳	海軍	192,259
9	芳雄	麻生	185,214
10	赤池	安川	158,523
11	豊国	安川	153,372

【表4-1 安川の資産形成】

	1897 (安川本店)		1905		1914	
有価証券	29,003	6.0%	1,352,623	31.6%	4,805,086	41.0%
固定資産			1,380,888	32.3	5,445,000	46.4
地所建物			92,993	2.2	434,805	3.7
流動資産			1,447,706	33.9	1,041,873	8.9
合計	479,940		4,273,706		11,726,765	

(注) 中村論文による。

1897 (M30) は安川本店分

1914 (T3) は取得価格 (円) による。

【表4-2 資産家名簿】

1	安川敬一郎	福岡県遠賀郡	1,000	
1	広瀬二三郎	西区江ノ子島	1,000	海運業兼業
3	貝島太助	福岡県鞍手郡	800	
4	麻生太吉	嘉穂郡飯塚	500	
4	緒明圭造	荏原郡品川町	500	海運業兼業
6	中野貫一	新潟県中蒲原郡	400	
7	田部長右衛門	島根県飯石郡	300	
7	伊藤伝右衛門	嘉穂郡大谷村	300	
9	堀藤十郎	島根県鹿石郡	250	
10	松本健次郎	遠賀郡戸畑村	150	
10	飯田延太郎	麹町区上六番町	150	
10	大沢幸次郎	京橋区築地	150	
10	田中銀次郎	麻布区市平衡町	150	
10	横山章	金沢市高岡町	150	
10	中野徳次郎	嘉穂郡二瀬村	150	
10	古賀春一	長崎市上西山町	150	
10	成清信愛	大分県速水郡	150	

(注) 渋谷隆一「大正初期の大資産家名簿」を集計。



【図41 明治鉱業KK 戸畑本社】

このような安川の実業活動をベースとして、日露戦中戦後の石炭業における高収益と鉄道国有化にともなう株式譲渡金が次のステップとなった。この「意外の過剰」が、明治専門学校の創立と事業多角化の資金源となった。1906年の『日記』が記している。

・・・去る明治二十八年以来筑豊鉄道と九州鉄道との合併増資株の引受をなし、次で明治炭坑会社の設立及同社買収又は平岡の赤池炭坑に於ける権利買収等は適々以て余が負債を増加し、割引手形の増発一時巨万に達したるも、昨年炭坑の好成績により昨日三井銀行に返済したる手形を以て茲に総ての負債を償還するを得たり。而して尚此に有する山陽九鉄の両社株を政府が鉄道買収により交付すべき公債に換算するときは約貳百七拾万円の剰余を得ることとなるべし。於之余は此全額を以て兼て宿望せる大学校設立の資に供するを得るに至る。尚五ヶ年を経過せば多くの部門を増設するの期に達する難きにあらざるべし。(明治39年9月20日)

1906年、国有化法案が閣議決定されると九州鉄道取締役の安川は、買収条件の上乗せと「若シ顧ル処ナクバ大会社連合反対運動二出ツルモ可ナルベシ」を方針として運動を始めた。衆議院で原案通り可決されると、買収条件引き上げを「貴院二向テノ運動ヲ試」みた。「貴院委員会修正説決定ノ確実ナルヲ聴取」するや、安川は九鉄株と山鉄株の買収に動き、短期間に九鉄株3,550株、山鉄

株2,000株を取得した。そして安川による積極的な鉄道株取得は、九州鉄道の国有化直前まで続いた。買収までに所有株は山陽4,600株、九州32,367株（岩崎に次ぐ第2位）となり、120万円の「鉄道国有化にともなう剰余金」を手にした。

基金330万円（現金90万円、5分利付き国債240万円）、敷地78,716坪（地価30,043円）を寄付して財団法人が設立され（1907.9.29～1921.4.18解散）、明治専門学校が創立された（理事安川、総裁山川健次郎前東京帝国大学総長、校長松本健次郎・東京帝国大学教授的場中を予定）。国有化による5分国債240万円の年間利子約12万円が年間経常費であった。当時、東京高等工業や東京高等商業の年間予算が5～6万円であったから、潤沢な運営予算といえる。また、こうした拠金額は前例のないものであった。

【表5 安川の鉄道株の変化】

	九州鉄道	筑豊鉄道	豊州鉄道	山陽鉄道
1890.3		104		
1895.3		623		
// .9		2,743		
1896.3	255	2,563		
// .12	235	3,449		540
1898.3	8,358	←		540
1899.3	8,364			633
1900.3	9,563			633
1901.3	9,563			633
1902.3	11,856			
1903	13,569			
1904	13,436			
1905	19,492			3,000
1906.9	27,822			4,500
1907.7	32,367			4,600

中村論文による。原資料は安川家文書
各年・月は「末」である。単位は「株」。

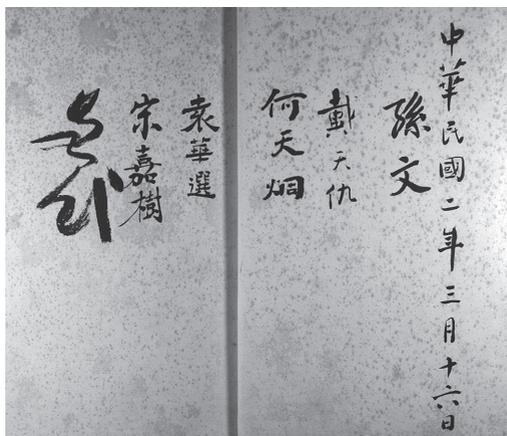
「大倉喜八郎氏の私立商業学校、住友吉左衛門氏の図書館、平沼専蔵氏の貧民学校、三井家の慈恵病院に続き、古河虎之助氏が壱百六万円を投じて九州東北及び北海道の三大学設立費に充てんとするの快報と前後し、我筑豊工業家中の一人安川敬一郎君が三百万円を擲ちて、筑前若松港の一角戸畑村に一大私立学校を設立...」 「全国に於ける公共的寄付事業として殆ど前例あるを見ざる」 (筑豊石炭鉱業組合月報3)

明専は、工業系の専門学校としては官立の5校(東京、大阪、名古屋、熊本、仙台)に続く日本で最初の私立の工業系専門学校であった。「技術に堪能なる士君子」を輩出していくことになる。

他方、日露戦時からの「余剰」を資金源として、事業多角化による「典型的な地方財閥」(森川英正)として展開していった。事業の多角化は二つの方向を持っていた。一つは鉱山業の多様化である。金属鉱業への進出と地域の拡張である。金山・鉄山を買収し、地域的には佐賀、北海道、朝鮮、満州、中国へと進出した(付図2参照)。

二つは、重工業を中心とした経営の多角化である。安川松本商店(1935年安川松本合名)を頂点として、大阪織物(’06年、30万円、平賀義美)、明治紡績(’08年、200万円、安川)、若松商業銀行(’12)、安川電機(’15年、25万円、安川第五郎)、九州製鋼(’17年、500万円、安川)、帝国鋳物(’17年、200万円、松本健次郎)、九州銑鉄(’18年、200万円、高木陸郎)、黒崎窯業(’18年、100万円、松本健次郎)と大戦ブーム期に相次いだ。

近年の研究によると、安川敬一郎・松本健次郎は、単なる炭鉱主あるいは地方企業家として見るべきではなく、その事業展開、そして政治的関わりから見ると「地方財閥」あるいは「全国的企業家」として捉えるべきだとされる(季武嘉也)。彼らが男爵・貴族院議員に就き、日本工業倶楽部など全国組織の役員を占めたことも、その現れであろう。と同時に迎賓館松本邸を訪れた人々、孫文を初めとして原敬、大隈重信、犬養毅などと語り、「商圈」をめぐる国際的地位の確立(安川の月中提携論)を目指したところにもうかがえよう。



【図42 芳名録（孫文）】

【安川・松本と八幡製鐵所】

安川・松本と官営八幡製鐵所とは深い関わりがあった。

官営製鐵所の八幡立地では、安川は決定的な役割を演じた。安川なしには、八幡への立地はあり得なかったと云ってもよい。また製鐵所の建設では、若松築港の会長として航路浚渫によって若松港の整備とともに製鐵所の海上輸送の確保を実現した。安川・松本事業の高雄炭坑を製鐵所に売却し、製鐵所の原料炭確保を確実にした。この売却は同時に安川にも新たな事業展開を開くものでもあった。

明治末からの安川・松本の多角化による「地方財閥」への展開も、製鐵所と関わりを持っていた。日露戦争による石炭景気と鉄道国有化は、安川・松本に「過剰な余剰」をもたらし、豊富な事業資金を用意した。鋳工業の中堅技術者を養成するために私立明治専門学校を設置し、地域工業化と製鐵所への人材を供給していった。帝国鑄物・九州製鋼・九州銑鉄・黒崎窯業・安川電機という重工業投資が安川・松本の「地方財閥」として稀な特徴を示すものであるが、九州製鋼が製鐵所西八幡工場として包摂され、製鐵所の耐火煉瓦技師のスピ

ン・オフとして黒崎窯業が確立した。こうした製鐵所との関係があつて、松本健次郎は日本製鐵株の発足 (1934年) では取締役就任に就いた (~1945年)。

1. 官営製鐵所の八幡立地・誘致

八幡に先じた明治初年の3官営製鐵 (釜石・中小坂・広島) は、いずれも鉄鉱原料立地で、そしていずれも事業は挫折した。1890年代になると、洋式鉄鋼業の導入には原燃料としての石炭のもつ意義が大きくなっていった。当時の近代的製鐵所は、鋼材1トンを生産するために4・5トンの石炭を要した。このため、炭田に近く、輸送の便を考えて、新官営製鐵所の立地は、当初から「門司の近傍」が有力であった。製鐵所初代の製鐵部長となる小花冬吉 (1890年)、初代製鋼部長の今泉嘉一郎 (1895年)、貴族院建議案趣旨説明 (1892年) などが、こうした立場を明瞭に示した。

日清戦争終結直前の1895年2月、衆議院が製鐵所設立を初めて可決した。設置された委員会が創立案を検討して、翌96年2月に創立予算が議会で承認されると、製鐵所官制が公布された。

この直後、衆議員平岡浩太郎、調査会委員長谷川芳之助、芳賀与八郎若松町長・芳賀種義八幡村長が若松の安川敬一郎宅に会合を持ち、八幡への誘致運動を開始した。福岡県知事、遠賀郡長という行政の支援のみならず、「財界の世話役」渋沢栄一が後ろ盾となった。渋沢はこの頃、三菱とともに筑豊鉄道・若松築港の相談役でもあった。

4月下旬、金子堅太郎農商務次官 (調査会委員長・立地委員長) が来県した。博多での全国商業会議所大会に臨席し、製鐵所位置を視察することを目的としていた。門司に到着すると、「安川松本商店にて饗応を受け」た。5月1日には、若松石炭取引所 (理事長安川敬一郎) の開業式で祝辞を述べた。その後金子は若松港を巡視し、安川経営の赤池炭坑を視察し、若松に引き返した。

5月9日、安川は若松築港の会長に就いた。中旬には、若松の筑豊鉄業倶楽部 (理事長安川) 新築に際して、この年9月に内閣を組織する大隈重信、松方

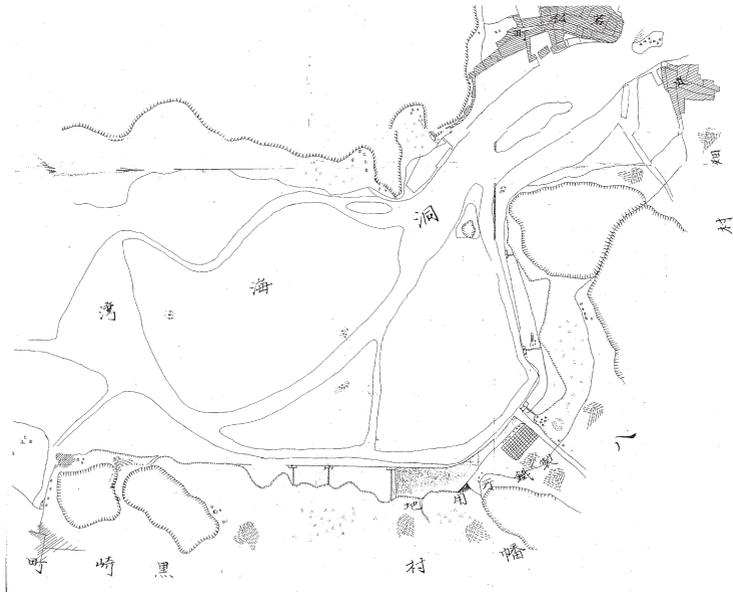
正義が相次いで若松に来訪した。松方は「鉄松方」と称され、議会で最初の製鋼所案を提出した首相でもあった。平岡、安川は、「洞海湾を天下に紹介するの目的」があった。この月下旬、八幡村では臨時村民大会を開いて、10万坪の土地提供を決めた。

6月下旬、就任直後の山内堤雲長官と大島道太郎技監が実地調査に訪れた。一行は、筑豊の炭坑を視察し、安川の赤池に泊った。若松では石炭集散の景況、取引の習慣などを調べ、小倉付近と大里を巡視した。大島は帰京後、小倉・大里に水量・地価などを問い合わせた。

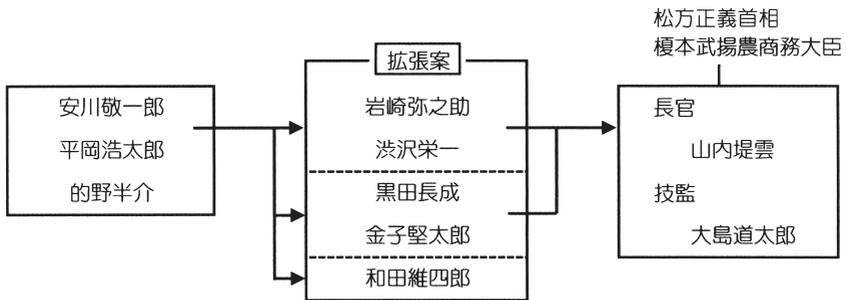
8月下旬、大島技監は、欧州出張の出発を間近にしながら、北九州の候補地を調査した。この調査は、「最後の位置決定」に関わるものであった。枝光だけでなく、大里では大久保水源地まで足を延ばし、板櫃付近ともに、「頗る精密に調査」した。

中村長官と大島技監は、「燃料の豊富なる洞海湾なれども、若松港口の水深浅く到底大船、巨船を出入せしむる能はずとて、此地も一旦は山内長官、大島技監等の絶望する所とな」った。大島は「大里を第一」とした。

八幡立地の弱点が洞海湾の水深の浅さにあることから、若築会社会長安川は、築港によって「20呎の水深を得る時は大里に優る處多きを占む」という確信のもとに、起死回生の政治工作につとめた。「築港拡張策」について大株主の旧藩主黒田、金子、渋沢、三菱の同意を得、農商務次官金子、「松隈内閣の生みの親」といわれた岩崎弥之助、そして渋沢と調査委員で後の長官和田維四郎を通して、山内・大島の説得を依頼した。この政治工作を図示すると、次のようになる。



【立地前の洞海湾】



(注) 安川敬一郎: 若築会長('96.5.9)

平岡浩太郎: 玄洋社初代社長、衆院議員、安川の「刎頸の友」

的野半介: 玄洋社、平岡の妹が妻

岩崎弥之助: 松隈内閣「影の功労者」('96.9.18)、日銀総裁('96.11.11)、若築筆頭株主

渋沢栄一: 「財界の世話人」、若築相談役

黒田長成: 旧黒田藩主、若築大株主

金子堅太郎: 農商務次官、製鉄事業調査会委員長、黒田家相談役、安川の旧友

和田維四郎: 元東大教授・鉱山局長、製鉄事業調査会委員・位置委員

(注) 洞海湾の築港を条件に誘致を働きかけた政治工作のあり方を示しているのが、安川の指示によって東京で活動した的野半助(平岡浩太郎の娘婿)への書簡(1896年9月10日付)である。

こうした安川の運動が功を奏した。大島技監一行が欧米鉄鋼調査・機械設備購入に出発（1896.10.20～'97. 9.27）した翌日、用地買収担当の製鐵所事務官に八幡出張の辞令が出された。年内に八幡用地20万坪の契約を終えた。芳賀村長など地元は、国家的事業に廉価な地価で協力した。用地買収予算20万円は、半分以下の9万円に抑えることができた。1万坪余が寄付された。

こうした後、1897年2月6日、「當省（農商務省）所管製鐵所八福岡県下筑前国遠賀郡八幡村二之ヲ置ク」と公示された。

筑豊炭田の有力炭坑主であっただけでなく、石炭の積み出し網（鉄道・港湾・石炭商）のトップにあった安川が、その政治的・経済的人脈を通して、官営製鐵所の八幡立地に決定的な役割を果たしことが確認できる。



- ◀「明治29年当時の製鐵所用地 および付近図」
- ①高見山。この山を海拔15m盤に削り、東田高炉群の建設を行った。①の東側が現在の高炉台公園。
 - ②塩田。
 - ③方角をあらわす記号の中央には、製鐵所のシンボルマークになった④がすてに使われている。

【図43 製鐵所用地】
(注)『製鐵所土木誌』による

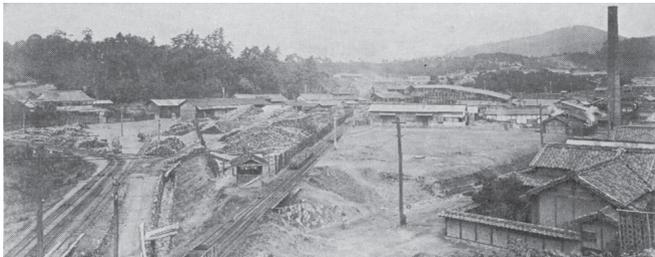
2. 若松築港補助金

官営製鉄所が八幡に立地する条件であった洞海湾の浚渫・築港は、当時資本金40万円の会社にとっては大きな負担であった。水深20呎・3,000トンの汽船入港を可能にするために、工事は二期に亘った。第一次拡張は幅13.6m・水深6mの航路の浚渫と防波堤築造で、工事費は160万円、第二次は残された浚渫工事で80万円余を要した。

会長安川は、資金調達、とりわけ二度の国家補助(合計100万円)を実現するために奔走した。

安川は、元老井上馨伯爵の政治力に依拠して、若松築港・九州鉄道株主である財閥・東京財界の渋沢栄一・岩崎弥之助(三菱)・益田孝(三井)・古河市兵衛・瓜生震(日本郵船)・大倉喜八郎・浅野総一郎、そして九州鉄道社長仙石貢・製鐵所長官和田維四郎の協力を得て国家補助の基本方針を確定した。第一次は製鐵所補助50万円、第二次は内務省国庫補助50万円を得ることであった。補助以外は財閥系と地元炭坑主からの増資によって工面した。とくに第二次の国庫補助は、相次ぐ地方特定会社への補助が反発を生み、衆院で二度に亘って否決されたが、安川らの貴族院議員への根回しと井上の政治力によってかろうじて実現した(1900年)。この直後、1900年10月に安川は会長を退いた。その後安川は取締役を1909年3月までつとめ、替わって取締役となった松本健次郎が、1919年4月から1951年11月まで長期に亘って会長に就いた。

こうした紛糾をともなった製鐵所航路は、1906年に竣工した。



【図44 高雄炭坑】

3. 高雄炭坑の売却

大島技監の欧米鉄鋼調査によって官営製鉄所の「創立案」は、大幅に変更された。国際競争力を考慮して規模を倍増した。ドイツの多品種向け技術・生産システムの導入をはかり、設計を依頼したグーテホフヌンク・ヒュッテ (Gutehoffnungshutte) をモデルに、原料から製品までの「混合企業」をめざした。1898年の議会で追加予算 (650万円、計1,059万円) が認められ、鉄鉾山 (新潟県の赤谷鉄山) と炭坑の買収をすすめた。

筑豊炭は新世代第三紀に属し、このために灰分が多く、粘結性が弱く、コークス原料としては弱点があった。他のコークス適合炭と配合することが欠かせなかった。こうした筑豊炭の中で、原料炭として使用できるのは、高雄、鯉田 (三菱)、大之浦 (貝島)、目尾 (古河)、庄司 (住友)、下山田 (古河) などであった (1895年野呂景義報告)。

1899年5月、製鉄所は高雄・潤野炭坑を買収して二瀬炭鉾とした。高雄が選ばれたのは、いくつかの候補の中で、入手が比較的容易であり、条件面でも適当であったことによる。

当初相田炭坑と称された高雄炭坑は、1880年に安川敬一郎の兄松本潜が創業した。買収前の高雄炭坑は、鉾区面積72万坪、年産17万トが見込めた。隣接する潤野炭坑の鉾区と合わせ156万坪となり、大規模開発が可能であった。また、製鉄所が当時必要とした年間9万トを十分にまかなうことができる。他方、安川・松本の事業展開において高雄炭坑は、借金の担保 ('98年2月の完済まで所有者は岩崎弥之助名義) として、返済不可能な場合には「手放すことに吝かでない」ものであった。また松本は「一世ノ事業終了」による隠居を控えていた。安川・松本の事業における高雄炭坑の意義は、他の候補が置かれている状況と異なっていた。三菱、古河、住友という財閥系炭坑および貝島における大之浦炭坑はそれぞれ生産基盤の柱であり、簡単に手放すことができなかった。安川・松本における石炭採掘の基盤は明治炭坑にあった。この明治炭坑は、この時期大阪資本を買収するための資金調達に苦慮していた。結局は、高雄炭坑

売却代122万円の内45万円を手にした安川・松本は、1902年に明治炭坑株を買収して個人経営とし、事業の中核に置いた。

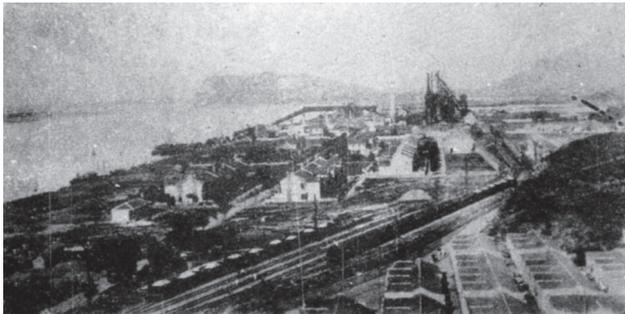
製鐵所による二瀬買収は、予想される採炭量400万トンを買収金額122万円、トン当たり0.27円で、当時の鉱区売買価格相場トン当たり0.5円からみて廉価だと評価された。

1899年12月、製鐵所は二瀬出張所を設置し、操業を開始した。1910年には、中央堅坑が完成し、筑豊を代表する大手炭坑となり、製鐵所受入炭52万トンの内32万トン（62%）を供給した。二瀬炭は予想された通りコークス原料炭として不十分であった。この改善ために、1910年から中国の本溪湖、開平から配合炭を輸入することになった。しかし、コークス原料炭の内、二瀬炭が3分の2を占め、調達価格での低廉さが経済的に貢献していった。

4. 多角化と製鐵所：帝国鑄物・九州製鋼・九州鉄鉄・黒崎窯業

安川・松本の重工業投資は、帝国鑄物から始まった。第一次大戦ブームで鉄鋼メーカーが簇生する中で、そのほとんどを輸入に依存していた製鉄・伸銅用ローラーを国産化しようとした。資本金200万円で、松本健次郎が社長に就き、若松に工場を建設した。大戦後の不況の中、東洋製鉄（戸畑）が製鐵所委託経営となると、戸畑鑄物が若松工場を買収した。現在の日立金属若松工場である。

九州製鋼は漢冶萍公司との日中合弁企業として計画された。



【図45 漢冶萍大冶鉄廠】参考文献25

1913年、漢冶萍の合弁事業化を目指す日本政府は、横浜正金銀行による1,500万円の「大借款」を契約した。資金不足に悩む会社は、この借款により600万円を旧債整理にあて、900万円の事業資金で再生を期した。アジアで最初の銑鋼一貫製鉄所であった漢陽鉄廠に加え、鉄鉾山の太治に最新の日産450トンの高炉2基を建設して銑鉄生産を拡充することにした。漢陽鉄廠の初期の100トンの2基と第3高炉250トンの1基（15年に250トンの第4高炉）、当時の八幡は第3高炉200トンの（14年第4高炉235トン）であったから、450トンの高炉は旧来から比して倍の規模を誇るものになる。この高炉の設計は、借款をきっかけに設けられた日本側最高技術顧問となった元八幡技監の大島道太郎が担当した（1914年1月～21年1月死去、その後は同じく前技監の服部漸が28年2月まで就いた）。漢陽鉄廠の4基と太治鉄廠2基で年産44万トンが見込まれた。官営八幡製鐵所への供給契約は、1916年以降は年8～12万トン、21年以降は年25万トンであったから、自製用を差し引いてもなお余剰が見込まれた。こうした状況から、借款を提供した横浜正金銀行頭取井上準之助が日中合弁の製鋼事業をもちかけた。「日支経済結合を根元とする親善策」を持論としていた安川がこれに応じたことになる。

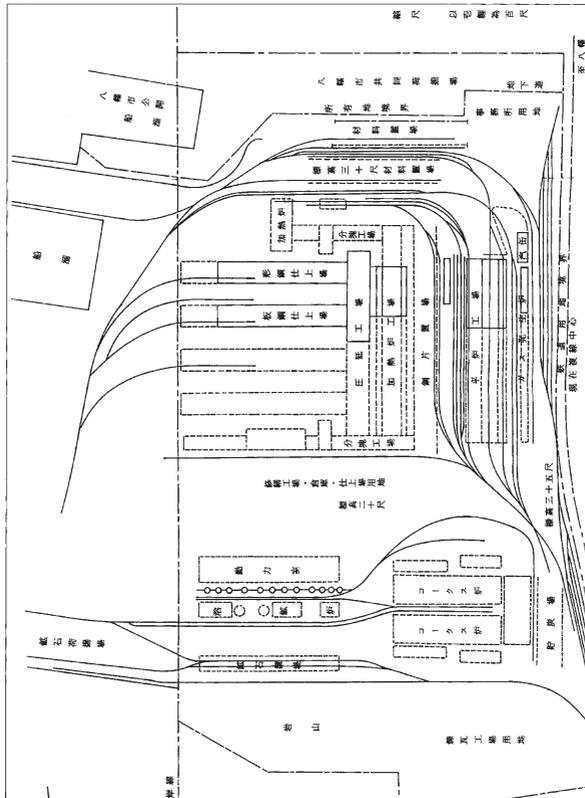
15年8月頃から安川は建設予定地や契約案の検討に入った。「八幡製鐵所によるべき種々の便宜を考へ其隣接地前田に工場の位置を卜定」した。製鋼工場は、当時製鐵所次官であった服部漸（1903.10～製銑部長、1914.8～製鐵所次長）が425万円の予算・設計を策定した。当時の製鐵所製鋼工場と同規模の50トンの塩基性平炉3基を設置するものであった。

合弁企業は袁世凱政府の認めるところとならず、一時頓挫した。「先づ銑鉄部処を建設」することを検討し、前田工場内に20トンの溶銑炉1基を設置した。これが1918年9月に設立された九州銑鉄(株)である（27年解散）。

1916年、盛宣懐と袁世凱が相次いで死去すると、状況が変化した。17年9月に合弁契約が成立し、会社が設立された。資本金1,000万円であったが、会社の出資は安川借入金であり、日中合弁会社とは言っても、資金的には安川側に全面的に依存したものだだった。



【図46 九州製鋼工場】



【図47 九州製鋼工場配置図】

(注) 図下部が九州製鉄になる

大戦の影響で工場建設が遅延した。20年にはアメリカ注文の機械類が納入され、23年には工場が竣工した。しかし、大冶鉄廠の銑鉄供給が途絶えていた。大冶の高炉建設も遅延し、技術顧問服部の指導による操業もコークス問題に苦闘し、「財政ノ窮乏」で「操業ヲ開始スル事能ハ」なかった。原料銑鉄の確保のために、漢陽銑鉄の分与を八幡製鐵所に要求したが、製鐵所への供給が優先された。九州製鋼は、1923年以降も、「原料タル銑鉄ノ低廉且安全ナル供給ノ途確立セサルヲ以テ寧ロ現状ヲ維持シテ時期ノ到来ヲ待ツノ得策」との判断に基づいて、作業開始を延期し続けた。1925年8月に合弁契約を解除し、八幡製鐵所に売却することにした。1926年2月、製鐵所長官との間で合併仮契約を締結した。しかし、政府による九州製鋼買収法案は、議会で否決された。九州製鋼は、設立以来約10年間の累積欠損額が約371万円にもものぼっていた。そこで、安川は、「経営委託」に転じた。1928年6月に契約を締結すると、製鐵所は「西八幡工場」（通称「第四製鋼工場」）として、同年11月に平炉による製鋼作業及び「製板工場」の作業を開始し、翌29年1月「型鋼工場」も作業を開始した。第三期拡張計画を推進していた製鐵所には、生産拡充の意味を持っていた。

1918年10月に設立された黒崎窯業株は、製鐵所耐火煉瓦技師高良淳の自立意欲と九州製鋼の耐火煉瓦自製との合作によって実現した。九州製鋼隣接地に、製鐵所耐火煉瓦工場と同じ規格で工場が建設された。19年5月に操業を開始し、珪石煉瓦を生産した。製鋼・ガス企業への販路が拡大していった。（戦後1956年に八幡製鐵株と企業提携した）

5. 明治専門学校と製鐵所

安川・松本が経営した私立明治専門学校（1909年開校～1921年官立移行）が9回の卒業式で送り出した卒業生は443名である。採鉱学科76、機械（工学）学科127、冶金学科53、電気工学科114、応用化学科73がその内訳である。学科特有の分野に人材を輩出した。企業では、地元北九州・福岡県の大企業が中心である。安川・松本系列企業は炭鉱18、他14の32名、全体の1割に達しない。

三井三池関係で27、八幡製鐵所は10名である。筑豊・北九州の企業への就職は、4分の1にあたる112名である。4大工業地帯の一角をなした北九州地域に、技術者を供給した状況をうかがうことができる。

明専卒業生の就職先

	採鉱	冶金	機械	応化	電気	計
陸海軍工廠		2	7		1	10
鉄道			9	2	3	14
官署	3		9	7	3	22
学校	5	6	5	11	6	33
研究所			1	2	1	4
造船所		1	15		6	22
製鉄・製鋼所		14	15	7	2	38
鉱山・鉱業会社	57	14	14	3	9	97
紡績会社			14		4	18
機械会社・製作所			16		3	19
電気機械会社			5	4	23	32
電気事業会社		1	1	1	32	35
化学工業会社		2	7	31	5	45
在外国		3	3	1		7
自営	1	1	1		2	5
その他	6	7	4	4	9	30
死亡	4	2	1		5	12
合計	76	53	127	73	114	443

(注) 『私立明治専門学校』 p.261

私立明治専門学校卒業生の進路（3名以上採用企業）

	1913:	1914:	1915:	1916:	1917:	1918:	1919:	1920:	1921:	1922:	小計
八幡製鐵所	1	1	2	2			4				10
明治鉱業	1		1	1	1	1	1	1			7
豊国鉱業所	1	1	1		1	1	1	1			7
安川電機製作所	1		1	2	1		1		1		7
門司鉄道局運輸課			1	1				1	1	3	7
戸畑鑛物	1	2				1			2		6
九州電気軌道				1	2	2		1			6
赤池鉱業所					1		1	1	1		4
三井田川鉱業所	1	1					1	1			4
九州製鋼	1				1	1		1			4
桐野鉱業所（貝島）				1	2	1					4
製鉄所二瀬								1		2	3
明治紡績			1	1						1	3
戸畑旭硝子				2	1						3
門司浅野セメント			1					1	1		3
門司税関		1							1	1	3
三菱金田炭坑					1		2				3
三池鉱業所		3	2	1	1	2	1	2	1	1	14
三池製錬所	1	1	1			1	1				6
三池染料工業所				1		1	1	1			4
九州水力電気				1	1			1		1	4
九州電燈鉄道						1	1	1	1		4
三池製作所						1				2	3
明治専門学校		2		1	2		2	2	2	3	14
県立中学校（福岡県）		1				2	2		1	3	9
多久炭坑	1				1	1					3
長崎三菱造船所			1	1		1					3
日本窒素肥料（熊本県）				1						2	3
熊本電気					1			2			3
川崎造船所（神戸）	2	1		1	1						5
東京芝浦製作所	1			1		1	1	1			5
東洋紡績（大坂）	2	1	1								4
大同電力（大坂）（名古屋）								2	2		4
大阪工業試験所							1	2		1	4
日立鉱山（茨城県）			1	1	1						3
日本製鋼所（室蘭）（広島）		1					1		1		3
鐘淵紡績（兵庫）（大坂）			2			1					3
三菱造船所（神戸）			1		1	1					3
阪神電気鉄道								1	2		3
呉海軍工廠	1		2	1				2	6		12
佐世保海軍工廠	2		1						1		4
神戸鉄道局			1					1	1	2	4
農商務省燃料研究所（埼玉）						1			1	1	3
中学校（県外）		1					2	1	2	4	10
兼二浦三菱製鉄所（朝鮮）		1				5					6
清州鞍山製鉄所					1	2		1			4
朝鮮総督府鉱務課						1				2	3
撫順炭礦								1	2		3
自営		1	3	2	2	1	1				10
在外				1		1					2
不詳	2	3	2	5	2	2	2	3	1	2	24
死亡	4		4	4	1	1	2				16

	T2:	T3:	T4:	T5:	T6:	T7:	T8:	T9:	T10:	T11:	小計
鉱山学科（北九州・筑豊企業）	3	3	2	3	3	1	7	2	2	5	31
冶金（北九州・筑豊企業）	3	2				1	1	1	1	2	13
機械（北九州・筑豊企業）	3	4	3	5	3	4	3	3	3	4	35
化学（北九州・筑豊企業）				3	1	3	2	2	1	2	14
電気（北九州・筑豊企業）			5	2	4	3	2	2	1	0	19
総 計	9	9	10	13	13	12	15	10	8	13	112

（注）『明治専門学校（学校一覧）』（大正12年）の「個人リスト」より集計した。

【参考文献】

a. 伝記・回顧類

1. 『撫松余韻』非売品 (松本健次郎)、1935年
2. 清宮一郎編『松本健次郎懐旧談』1952年
3. 劉寒吉『松本健次郎傳』1968年
4. 島村史孝『道草人生 安川寛聞書』西日本新聞社、1989年
5. 『安川敬一郎日記』第一巻、北九州市立自然史・歴史博物館、2008年、第二巻 (2009年)
6. 安川第五郎『わが回想録』百泉書房、1970年
7. 『安川第五郎伝』1977年

b. 住宅について

*松本家住宅

8. 『重要文化財 旧松本家住宅修理工事報告書』1982年
9. 小泉和子編『松本家住宅の家具』西日本工業倶楽部、1985年
10. 足立裕司「旧松本健次郎邸とその建設経緯に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』511、1998年
11. 足立裕司「旧松本健次郎邸の意匠とその歴史的展開に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』517、1999年

*安川家住宅

12. 日隈康喜『安川家住宅——北九州の近代化を支えた安川家の住宅史』西日本新聞社、2009年

c. 事業について

13. 『社史 明治鋳業株式会社』1957年
14. 『私立明治専門学校校史』1922年
15. 『九州工業大学100年史』2009年
16. 森川英正『地方財閥』日本経済新聞社、1985 「昭和5年の16地方財閥」
17. 有馬学編『近代日本の企業家と政治——安川敬一郎とその時代』吉川弘文館、2009年
『地方都市の都市化と工業化に関する政治史的・行財政史的研究』(科学研究費研究成果報告書、研究代表者有馬学) 2007年
18. 中村尚史「「地方財閥」の誕生——安川敬一郎の事業活動と資産形成」(東京大学 ISS Discussion Paper Series J-168) 2008年
19. 清水憲一「三菱と北九州経済」『九州国際大学論集』2-3、1991
20. 清水憲一「『安川敬一郎日記』と地域経済の興業化について」『九州国際大学社会文化研究所紀要』38、1996
21. 合力理可夫「安川・松本財閥における鉄鋼業経営について」『第一経大論集』29-2、1999

清水憲一：旧松本家・安川家住宅について —— その建築的価値と日本を代表する地方財閥 ——

22. 新鞍拓生「八幡製鐵所における筑豊地方からの原材料調達と筑豊鋁業主」（長野暹編『八幡製鐵所史の研究』日本経済評論社、2003）

d. その他

23. 鈴木博之監修『元勲・財閥の邸宅』JTB、2007
24. 『北部九州を中心とした炭鋁関連施設に関する建築学的研究』（科学研究費研究成果報告書、研究代表者川上秀人）2000年
25. 湖北省冶金志編纂委員会『漢冶萍公司誌』华中理工大学出版社、1990

【付表 安川・松本の略年譜】

	炭鉱業	販売業	炭況・資金調達など	その他事業	その他
1849 嘉永2					5.9 敬一郎、福岡島崎村の徳永家に生まれる。幼名藤四郎
1864 元治1					11. 安川家の養子となる (16才)
1866 慶応2					家を継ぎ、敬一郎と改名
1868 慶応4					峯と結婚 (18才)
1869 M2					藩の学問所助教となる
1870 M3					京都留学
1871 M4	7. 松本潜・幾島徳は炭坑業を始める 業務はすべて幾島が担当				10.4 健次郎出生 静岡に留学し、勝海舟の勤めで洋字に恋す
1872 M5					10. 東京留学
1874 M7	2. 炭坑業を継ぐ (松本潜は相田、安川は東谷炭坑)				7. 慶応大学入学 2. 季兄幾島徳病死のため帰郷
1876 M9					
1877 M10		芦屋に安川商店開業			
1880 M13	「良質」というポッター調査により 鉱区を拡張し、相田・庄司鉱区に 高雄・伊岐須両坑を起業		製塩用需用減退のため苦境、博 多商人衆総平の融通で息をつく		
1885 M18		神戸支店開設			
1886 M19	1. 海軍予備炭田開放の具陳のため上京 白土武市より勢田鉱区買収 (M2) (新坑開鑿、明治第一坑)	本店を若松に移転 大塚支店開設			第五郎出生

1887 M20	<p>葦穂郡勢田鉱区買取（岩井伴七と折半掘契約→炭坑開鑿＝大城炭坑、M28岩井分を買収し明治第二坑）</p> <p>筑豊初のダイナマイト使用この頃、「我炭坑業は少しく目を惹くに至った」、「最初の事業発展期」</p>	<p>大城開坑資金は神戸炭商岡田らが2万円出資し、損益折半の契約</p>		
1888 M21	<p>6. 赤池坑を平岡と共同経営（M22炭坑開鑿着手、M34専有40万円）</p>	<p>8. 九州鉄道創立</p>		
1889 M22		<p>8. 筑豊興業鉄道創立 10. 若松炭坑創立</p>	<p>若松船頭町に転居</p>	
1890 M23	<p>この年から27年秋までは「弧線的融通」に重心を移し、「事業開始以来の最難期」</p> <p>この頃、大城・相田・伊岐須・赤池は筑豊の「大炭坑」として名を運ぶ。</p>	<p>4. 平岡とともに麻生の総田炭坑を三菱に売却の仲介 赤池開坑資金を平岡は岩崎から、安川は辰谷川から各3万円融通される</p>	<p>健次郎は松本家に養子、結婚（20才）</p>	
1891 M24			<p>平岡とともに三菱に働きかけて、筑鉄改革を策し、取締役になる</p>	<p>健次郎は米国留学（～93）</p>
1892 M25				
1893 M26	<p>健次郎帰国し門司支店設立 健次郎、サミュエル商売に1万円売り込み</p>	<p>炭坑不況により「炭坑の維持に汲々」とし、「一鞭の望は鉄路開通…運炭の至便あるべき」</p> <p>この頃、三菱の「急迫なる督促」春、三菱と相田（高雄）坑炭炭契約を結び、同炭坑を担保に6万円借入</p>	<p>若松会社は半額減資・工事変更し、三菱の協力を得て軌道に乗る</p>	
1894 M27	<p>8. 日清戦争 10. 赤池炭坑は鉄道輸送を開始</p>	<p>戦争によるものアップーム</p>	<p>安川は石炭問屋組合（M8設立）相談役</p>	
1895 M28	<p>勢田鉱区の残半分を買収</p>	<p>三菱は「松本清資金勘定」を計上する 下期、赤池炭坑に2万円</p>		

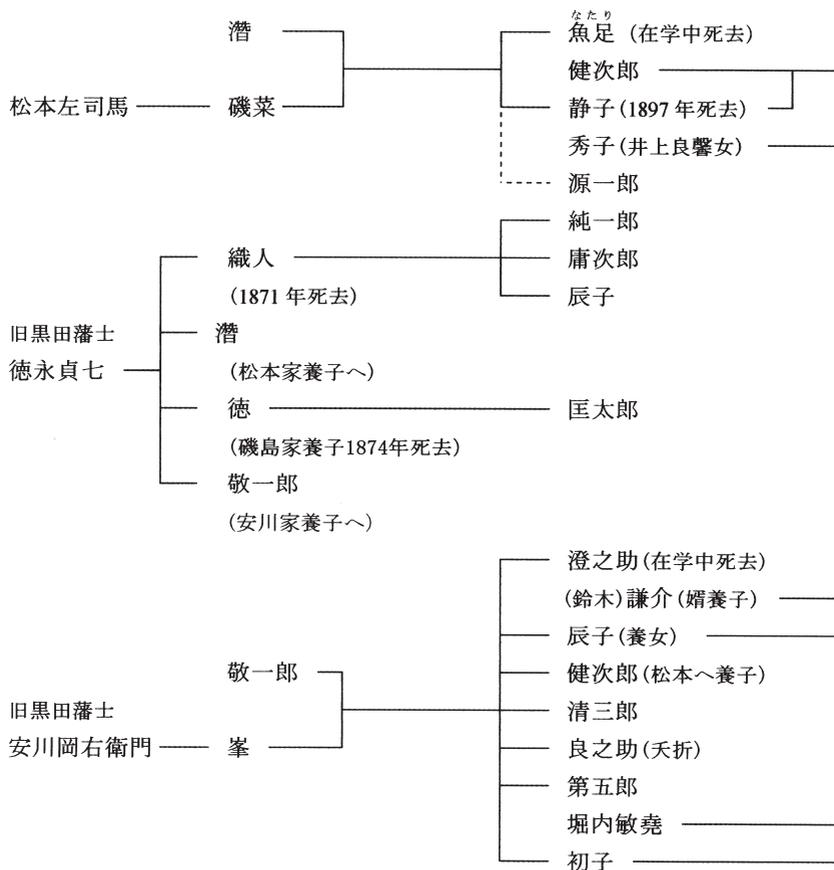
1896 M29	4. 明治炭坑会社創立 (大阪、30万、社長桑原政) 大城＝第一坑、新田＝第二坑	上期、赤池坑社債8万円	1. 若松貯蓄銀行設立 (6万円、社長杉山松太郎、安川相談役→T11 若松商業銀行、T14 住友銀行に合併) 4.29 若松炭港会社の社長就任 香～製鐵所誘致運動 11. 築鉄取締役役に就任	
1897 M30	明治炭坑60万円に増資 5.2 明治第一坑坑内火災→稲垣徹之進を専務としてこれにあたる		10. 筑鉄は九鉄に合併、取締役に	
1898 M31	2. 10万円増資して日焼坑買取 (明治第三坑) 7. 田川採炭組創立 (120万円) で買取→M33.3三井に売却 (165万円)	2. 三菱の「松本潜資金勘定」消滅＝借益完済 4. 明治炭坑株は優良株として炭鉱株として初めて大阪株式取引所で定期売買	11. ～若築会社の製鐵所補助50万円 門司石炭商組合 (M28設立) 組合長 (～?)	
1899 M32	2. 納屋制度を廃止 5. 製鐵所へ高雄坑売却 30万円		4. ～若築の国庫補助50万円 9. ～九鉄紛争	松本潜引退
1900 M33	9.17 明治第一・2坑運炭線路完成、川橋使用を廃止 田川採炭を三井に165万円で譲渡 この年、炭券廃止 (法的にはT8廃止)		この年、若松石炭業組合 (M29 改称) 組合長	
1901 M34			8. 若松石炭商同業組合設立し、組合長就任 (～M40、M42) 11. 製鐵所開始式	2.15 松本潜死去
1902 M35	1. 新田に本社新築 11.30 明治炭坑会社を解散し個人経営とする	解散時の総資産 125万1,710円	4. 赤池炭坑に鉱山学校を創立	

1903 M36	1904 M37	1905 M38	1906 M39	1907 M40	1908 M41	1909 M42	1910 M43	1911 M44	1912 M45	1913 T2
6. および11.15 赤池炭坑内火災 (M37.4.1復旧) 10. 筑豊石炭鉱業組合総長 (~M44.3)	筑豊大手は出炭制限 2. 日露戦争	日露戦争によって「事業の基礎が確立」の確信 = 「天恵」(石炭利益130万円・公債270万円)	明治第四坑起業	7. 豊国のガス爆発 9.4 豊国炭坑を引き継ぐ (200万円)	1.7 明治・赤池・豊国炭坑を併せて明治鉱業株式会社設立 (500万円、代表安川→18明治鉱業株式会社 (1,000万円、社長健次郎) 佐賀泉多久鉱区買取 (T2多久炭坑起業)	豊国第四坑起業			8. 朝鮮安州炭礦を買収 明治第五坑起業	
	戦争にともなうブーム		9. 三井銀行返済ですべての負債を償還 鉄道国有化決まる							
			8. 萍鉄設立委員 9. 大阪織物合資会社を創立 (30万円 →M44.7株式会社 (70万円、社長平賀義美 →S16 呉羽紡績へ合併)	6. 明治専門学校認可						
			10.24 平岡浩太郎死去							
				7. 九州鉄道国有化 6. 明治専門学校認可	8. 明治紡績合資会社創立 (200万円、代表健次郎 →S16 福島紡績に合併 →S19 敷島紡績)					
									11. 朝鮮昌城金山の経営着手披露	12.15 安川、松本は戸畑転宅
										9. 米国漫遊
										1. 朝鮮支店設置

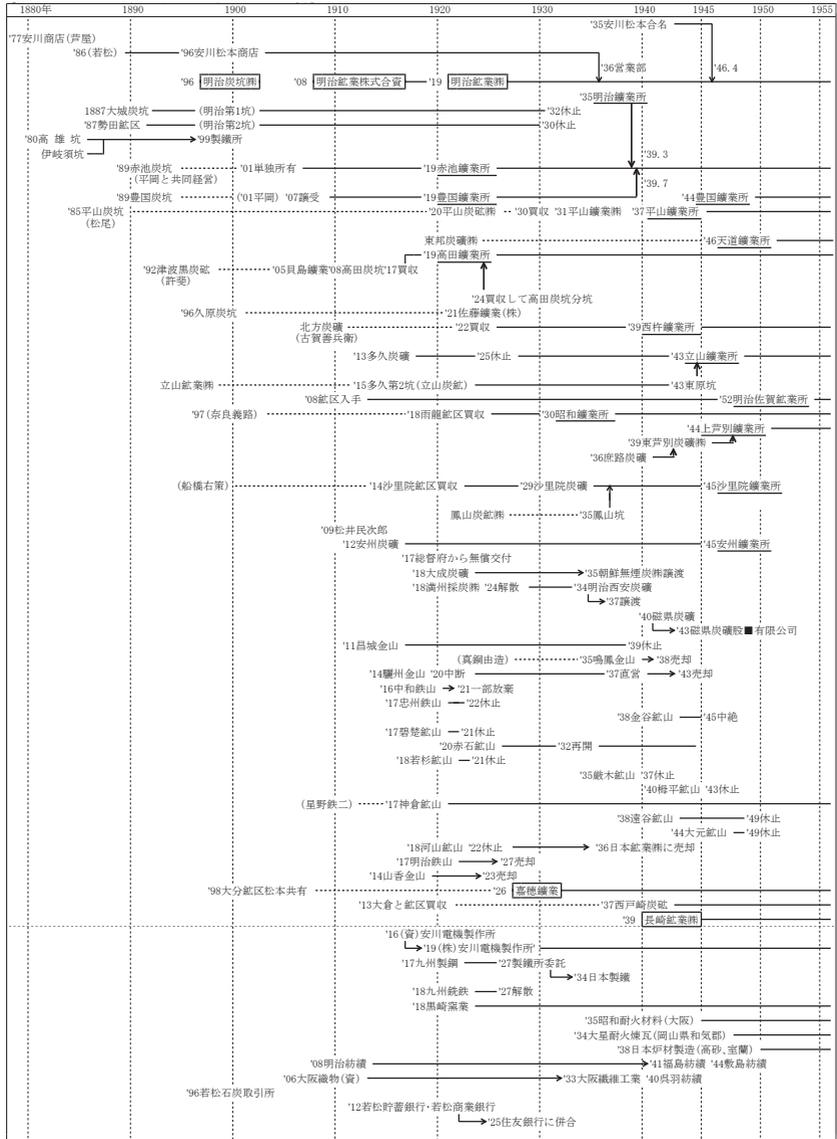
1914 T3			3. 筑豊出炭制限 8. 第一次大戦		7. 朝鮮に安川松本農場 (→S11 譲渡) 10. 朝鮮雲達・ 12. 豊州金山買収 7. 合資会社安川電機製作所創立 (25万円、代表第五郎→T8.12株式会社 (125万円、社長清三郎) 7. 日親総裁井上進之助から漢治萍公司との提携事業打診→ 9. 健次郎らを調査派遣	福岡市より衆議院議員に選出
1915 T4			1. 対華21カ条要求 大戦ブーム始まる		8. 朝鮮中和鉄山買収 9. 大分県のマンガン鉱区買収 山東省中興公司 縣炭坑を経営 (30万邦借款)	「論語叢筆」を始める
1916 T5			11. 筑豊、出炭制限撤廃		7. 帝國鑛物設立 (200万、健次郎→T10戸畑鑛物に譲渡) 9. 九州製鋼創立 (500万円、漢治萍公司との合弁、社長安川→S2八幡製鐵所に委託) 大分県の金鑛鉱区・高田炭鑛・山口県の明治鉄山 (→S2売却) 朝鮮忠州鉄山・仏頂面鉱区の買収、朝鮮大邱鉱区の無償供与 濟州西玄炭鑛の投資開発	
1917 T6					9. 九州鉄鉄 (200万円、社長高木健郎→S2解散) 9. 瀧州採炭 (→T13解散) 10. 黒崎窯業 (100万円、社長健次郎) 設立	4. 70才を迎え安川敬一郎引退、社長は健次郎
1918 T7					山口県の河山鉱山・北海道雨竜鉱区・鳥取県の若杉鉱山・大分県の石灰鉱区・岐阜県のマンガン鉱区・朝鮮の鉄鉱区買収	

1919 T8	4.1 明治鉱業株式会社に改組し、12.1 戸畑の新社屋に移転、増資(2,000万円) 8. 「信和会」設立			3. 健次郎は筑豊石炭鉱業組合 総長(～S8.3) 12. 協議会設立され安川理事	健次郎は筑豊石炭鉱業組合 総長(～S8.3) 12. 協議会設立され安川理事
1920 T9		3. 戦後恐慌		6.28 明治専門学校を政府に献納の発表(→T10.4.18財団解散) 横島炭礦、愛媛県の赤石鉱山買収	男爵となる
1921 T10				朝鮮の金屬諸鉱区を廃業	
1923 T12	佐賀県杵島郡の鉱区(北方炭礦)買収				
1924 T13					貴族院互選議員となる
1926 T15	12.1 嘉穂鉱業(300万円、社長健次郎)設立				
1929 S4	5. 敬一郎は明治鉱業相談役辞任、健次郎社長辞任、清三郎社長 明治御徳・滝之美両礦買収			健次郎は日本工業倶楽部理事に就任	
1930 S5	1. 昭和鉱業所設置 10. 平山炭礦買収				
1931 S6	1.12 平山鉱業設立(200万円、社長清三郎)				
1932 S7				健次郎は昭和石炭KK社長に就任	
1933 S8				健次郎は石炭鉱業聯合会会長に就任	
1934 S9					11.30 安川敬一郎死去 86才
1935 S10	12.17 安川松本合名創立(2,000万円、代表健次郎)			3. 清三郎は筑豊石炭鉱業組合 会長	

【付図1 安川・松本家系図】



【付図2 安川・松本の事業展開】



(注) 出資関係会社を除いた戦前の直系・傍系会社、『九州財閥の形成』『社史(明治炭業)』による。鉱山部門の□は独立した会社、—は明治炭業網の事業所を示す。……は安川、松本に買収される前を示す。